**平成24年度　高知県心の教育センター研究員研究報告要旨**

高知県心の教育センターでは、いじめや不登校・非行等の問題への対応を充実させるとともに、予防的な視点に立ち、生徒指導、学級経営等のあり方について、関係機関と連携して研究を行い、子どもたちの豊かな心をはぐくむために心の教育の充実に取り組んでいます。

本研究員制度は、勤務地において通常の勤務をしながら、心の教育センターと連携して実践的な研究を行うものです。本年度は、５名の研究員からの実践が報告されました。この研究の成果を広く知ってもらえるように、ホームページ上に要旨・報告書を掲載することにいたしました。

なお、研究の詳細を知りたい方は、高知県心の教育センターまで、問い合わせていただきますようお願いします。

Q-Uを効果的に活かした学級経営の在り方について

　　　　　　　　　　　　　　　高知大学教育学部附属小学校　教諭　廣瀬紀一

　本校の児童は、高知市の全域から登校しており、地域の中で関わり合うことは少ない。さらに、本学級においては本年度クラス替えがあり、子どもたちは新しい人間関係の中でのスタートとなった。これらのことから、「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U（以下Q-U）」を活用したあたたかい学級づくりを前進させることを目指し、研究に取り組んだ。

　研究においては１回目のQ-U（５月）の結果分析をもとに、『構成的グループエンカウンター』『プロジェクトアドベンチャー』等の授業実践を仲間づくり活動（学級活動・年間８時間程度）として取り組んだ。また、道徳の時間（年間６回程度）を通して、主題のねらいを達成することとともに、望ましい学級集団づくりを目指した。そして、これらの実践を、２回目のQ-Uの結果分析や日常観察等をもとに、学級全体の様子の変化とともに個々の児童の変化にも目を向けて分析・考察した。

キーワード：Q-U、構成的グループエンカウンター、プロジェクトアドベンチャー、道徳授業

予防・開発的教育相談の考えを生かした支援のあり方

―　学級づくりと授業づくりを中心にして　―

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　いの町教育研究所　研究主事　田所　三佳

近年、児童を取り巻く家庭、地域、社会などの環境の変化が著しい中で、本来集団が持っている気づき・洞察・試行錯誤・模倣などを学ぶ教育的機能が失われている面がある。そのため、問題解決のための生徒指導に加え、問題の早期発見や問題を生み出さないための個や集団への予防・開発的教育相談の考えを生かした支援が必要となってきている。現在の子どもたちの現状を理解し、現状に即した教育相談的なかかわりを教師が日々の学級づくりや授業づくりで実践していくことが求められている。そこで本研究では、「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U（以下Q-U）」で児童の実態を分析し、予防・開発的教育相談の考えを生かした学級づくりの具体的な支援のあり方について考察した。そして、仲間づくりをねらいとした学級づくりプログラムを作成した。また、教育支援センターにおいて、個に応じた成長・発達を促す活動プログラムを継続的に実施し、成果について考察した。

キーワード：予防・開発的教育相談、Q-U分析検討会、学級づくりプログラム　個と集団への効果的な支援、教育支援センターでの実践

hyper-QU を活用した温かい学級づくりを考える

安芸市教育研究所　特別研究員　吉本慶子

　Ａ市の不登校の割合は高知県や全国と比べ、高い状況が続いている。本年度から２年間、「温かい学級づくり応援事業」の重点支援を受け、『よりよい人間関係づくりのできる子どもたちの育成』を目指して取り組んでいる。

初年度の今年は、「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート（以下、hyper-QU）を活用することにより、児童生徒の学級生活のいごこち感を高め、不登校等や問題行動の解消につなげたいと考えた。今年度は教員の意識変容を促すべく、専門家の県外講師の招聘や心の教育センターからの講師派遣による研修会や講演会を行った。

その結果、教員の意識変容やhyper-QUの「学級生活満足群」の割合の向上がみられた。しかし、まだまだ課題も多く、来年度はより効果的に活用できるような手立てを仕組んでいきたい。その中で、小中連携を強化し、中１ギャップの解消など不登校を増やさない工夫や授業改善にも努めていきたい。

キーワード：不登校、学級生活満足群、 hyper-QU

ピア・サポート・プログラムによる仲間づくりの取組

太平洋学園高等学校　教諭　平松　民・山下　大志

本校では、今年度より多様な取り組みの１つの柱としてピア・サポート・プログラムの導入を積極的に行っている。本研究では、本校のボランティアサークル「ＤＡＣ（Dynamic Activities Circle）」に意欲的に参加している生徒が、「友人が欲しいが作り方が分からない」という課題の見られる生徒を限定的に支援する小規模なピア・サポート・プログラムを実施した。

本研究においては、支援する側の生徒へのトレーニングを簡略化し、試験的に多数のピア・サポート活動の実践を行った。トレーニングが不十分であった反省点もあげられるが、そのことによって結果的に生徒が本来持っている優しさを自然な形で発揮できることにもつながった。また、支援される側、支援する側の生徒とも、活動の中で、肯定的な変化が生じてきたことも研究の成果といえる。今後、本校の特色を活かし、本校でしかできないピア・サポート・プログラムを作成していくための課題と展望を述べる。

キーワード：ピア・サポート・プログラム、ヘルパー、ヘルピー、自己理解、他者理解